

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成27年 12月 第178号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

『創造性豊かな死後の物語を』

—予防という名の悲劇を幸せの道標に変えて—

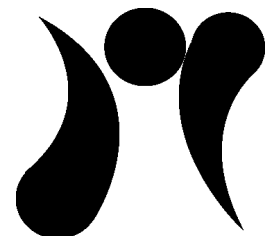
7月5日(日) 読売新聞「今日のノート」に『謝罪と信頼』と題した編集委員・原昌平氏の一文が載っています。ナチスドイツが膨大な数のユダヤ人殺害に先行して、精神障害者・知的障害者・神経疾患の患者など推定30万人の命を奪っていた事に対して、ドイツの精神医学会は2010年に犠牲者への追悼式典を開き、謝罪を表明した。当時の学会長だったアーヘン大学のフランク・シュナイダー教授が、大阪で6月に開かれた日本精神神経学会の学術総会で『ナチ時代の精神医学』に関する特別講演とパネル展示が行われた事を紹介されています。『最初は、1933年に成立した遺伝病子孫予防法に基づく障害者の強制断種だった。39年からは「T4作戦」がひそかに進められた。鑑定医たちによって価値なき命と判定された障害者や患者は、ガス室や注射で殺されていった。関わった医師たちの一部だけが戦後のニュールンベルク裁判などで裁かれた。』

日本でも以前は、「らい予防法」によりハンセン病患者の強制的な隔離や断種が行われていました。「優性保護法」では母体保護と併せて『病気や障害のある子』を生まない措置を採っていました。かつては、日本でもドイツでも『治らない病気や障害の人』は「予防」と言う名の下で、その存在が否定されてきたように思います。

6月27日(土) 神戸新聞に『新出生前診断・異常確定230人大半が中絶』との見出しの記事があり、『ダウン症の出生前診断を実施している病院グループが検査開始後2年間の実績を公表し、異常が確定するなどした人のうち、大半の221人が中絶した』と載っています。今現在の日本でも、ダウン症児を生まない為に、出生前診断が行われています。

自然の摂理に添って迎える「老いの暮らし」は、当然に『心身機能の低下と死』を伴い、『如何に生きて、如何に死ぬか』を問い掛けます。老いの身は、病気になり、障害を持ち、間近に訪れる死を予感しながらも、『今生きている』事実と向き合い、混乱と葛藤を繰返しながらも誇りを持って

(次ページへつづく)



(前ページのつづき)

懸命に生き、穏やかに尊厳ある『最期』を迎えます。その姿を目の当たりにして次の世代が、『思想』を深め、豊かな『人間性と社会性』を育み、其の成果が社会に反映して進歩・発展し、現在まで約2000年の歴史が続いてきたのです。『老いて病気や障害・死』と向き合う暮らしは、『死後に続く物語』の中で人が歴史を引継ぐ為の創造力を育む、豊かな『源泉』であったのだと思います。

人生途上で病気・障害・死と向き合う命も、或いは、生れながらに病気・障害・死と向き合う命も、懸命に生きて命を輝かせ、『心の葛藤と精神的な営み』を経験させて思想と社会性を育む『個人の願望を超えた』存在なのです。

超高齢社会を迎えて『健康でこそ長生きの価値がある』と多くの人が『願望』に添って『介護予防』に努め、『健康寿命』を伸ばす努力をします。『ピンピン・コロリが老いの理想』と言われますが、次の世代の人にとっては、「ピンピン・コロリ」では「死と向き合う」際に起こる『心の葛藤』が希薄になり、『死後の物語』が貧弱になって『深い思想や豊かな人間性・社会性』を育む力が弱くなり、歴史を引き継ぎ難くなります。

現実にこの40年間、高齢者の寿命はひたすら延び続けて『平均寿命83.4才』は世界1位(OECD2013年)ですが、一方でその間、出生児数は200万人から100万人へと半減しました。これから更に大幅な人口減少が予測され、極めて不自然な人口構成の状況が続きます。『願望』を追い求めて行き着いた先は、極めて不本位な『現実』でした。

そして今、『介護現場』に人が集まらず、『介護人材不足』が深刻です。要介護にならない『予防』を『是』とする制度の下で、要介護になってしまった人の存在と、その生活を支える介護を高く評価する『根拠と理屈』が成り立たず、『介護』は非常に不人気の職業となってしまいました。

老いて死と向き合う暮らしは、吾身が要介護になり認知症になって柔軟に変身を繰り返して、『変化の極意』を次の世代に伝える姿にも思えます。『柔軟に変化し得る』生物のみが、地球上で生き延びる事が出来るのです。

ピンピンとコロリの間の「要介護」の暮らしを、予防するのではなく、『生身の変化の在るがまま』を他者に委ねて『老いの本質』を伝え、誇りに満ちた穏やかな顔で最期を迎えたい、と切に願います。介護職は、要介護や認知症の姿を、『変化の極意』を伝える『幸せの道標』と受止め、『主役としての自立と誇り』に応じて介護し、ご家族や地域の人と連携して支える、重要な役割を担います。

団塊の世代が後期高齢期に入る2025年以降の20年間は、『超多死』の社会です。世の中に『死後にも続く物語』が溢れます。その『死後の物語』が、『深い思想と豊かな人間性と社会性』を育む、創造性豊かな物語であれば、団塊以降の世は『超幸福社会』になる可能性があります。介護の役割は重大です。

『豊かな創造性を宿す物語』が死後に続く為、介護現場において『変化の極意』を受継ぐ為の『仕掛け』が重要です。『まさに今』2025年を視野に入れ、『柔軟に変化し得る人と社会』の実現に向けた工夫を図ります。

今建築中の『アトリエ』は、見ず知らずの他人が『変化の極意』を垣間見ることのできる工房であって欲しい、と願って造ります。『定期巡回・随時対応型訪問介護看護』は、サ高住をモデル住宅として地域に展開し、お年寄りの自立と誇りに応えて最期まで介護し、死後に続く創造性豊かな物語のプロローグにつながります。



「人は生まれた瞬間から死に向かって生きている」といいますが、いつか必ず死ぬとわかってはいても遠い未来のことだと思っていたり、どのような最期を迎えるのだろうかと思いを想像するものではないでしょうか。いつか誰かの手助けが必要になるだろうが、負担や迷惑をかけたくない・・・と思うのは誰しも同じだと思います。でも自分が『歩けない・食べられない・判らない』ようになればどうしたいのか。どうしてほしいのか。そして家族がそのような状態になればどうするのか。どのようにしてあげたいのか。考えて決断を迫られる場合があります。

数年前担当させて頂いた癌末期・余命数ヶ月の宣告を受けた独身男性は、医療用麻薬を使いながら自宅で暮らしていました。自分が動ける間に、亡くなった後、甥や姪に迷惑がかからないように身辺整理をして、後々のことを甥達に頼みました。また古くからの友人にも連絡をとっていました。しかし排泄と入浴が一人で出来なくなれば病院（緩和ケア病棟）に行く決めていました。様々なサービスを利用することで自宅での生活はある程度続けられたかもしれませんが、最初に言われた通り、自分で自宅での暮らしに区切りをつけられ甥子さんにつき添われ病院に向い、数日後亡くなられました。最後に自宅の鍵を閉めるその方の手の震えを今も忘れることができません。

ある方は自宅で倒れ、救急車で運ばれた病院で癌があちこちに転移していることが分かりました。数年前に癌と診断されていたけど本人が大の病院嫌いで治療を拒否していたそうです。家族も本人が病院嫌いだから・・・と気になりながらも何もできずにいたそうです。その数日後、退院を強く希望し自宅に戻られましたが、日に日に体調が悪くなり布団から起き上がれなくなっても病院に行くことも医師に診てもらうこともされませんでした。もちろんかかりつけ医も居なかったため、このまま自宅で亡くなられた場合、警察に連絡をして検死してもらわないといけなくなると家族に説明すると「それは困る」ということで、近くの内科に本人と家族が診察に行き、事情を説明し「もしもの時は対応します」と言ってもらえたことで何とかその方は最期まで自宅で過ごすことができました。

どちらのケースも本人が「どうしたいのか・どうしてほしいのか」を家族や周りの関わった人達に伝えることができた上で、家族などが「どうしてほしいのか・どうしてあげたいのか」がある程度合致し、理解と協力があつたからこそ成立したケースではないかと思っています。本人と家族の思いの差が大きければ大きいほど、日々の生活は満足いくものにはならず精神的な負担が大きくなるのではないかと思います。高齢者が高齢者の介護をする老老介護、認知症の人が認知症の人を介護する認認介護、未婚の息子や娘が一人で介護する息子（娘）介護、女性の晩婚化で出産年齢が高齢化し親の介護と子育てを同時に行うというダブルケア・・・家庭それぞれに色んな形があるように、介護も千差万別、十人十色です。

ケアマネジャーとして、介護を必要としている方の思いに寄り添いながら、それぞれが一人で抱え込まずリスクを分散し自分自身が満足できることをしてほしい。介護を通して家庭が壊れたり、共倒れになってしまう前に相談してもらいたい。何かのきっかけになる存在になりたいと思っています。利用者とその家族が共に問題を解決し満足してもらおうことができるように、これからも頑張っていきたいと思っています。

厨房だより 管理栄養士 田村愛弓

2015年もあと数日を残すところとなりました。皆様のお宅では、一年の埃を落とす大掃除や新年を迎える準備など慌ただしくされていることと思います。

この度はお鍋にかかせない食材についてご紹介します。普段何気なく鍋の具材として購入している白ネギや水菜、春菊ですが、実はとても健康によい働きをもつ野菜です。これらの野菜は総じて生活習慣病予防に効果的といわれ、特に白ネギは血液を固まりにくくして心臓血管や脳血管障害を防ぎ、血圧上昇を抑える他、血糖値を低下させる働きも持っています。水菜は身体をサビ（酸化）させる有害物質を解毒する作用があるので、身体の細胞にとって強い味方となってくれる野菜です。春菊もとても優秀な野菜で、カルシウムやミネラル、カロテンを多く含むので貧血予防や皮膚・粘膜保護に効果的で、その他ポリフェノールも多く含んでいるのでコレステロール値の低下にも役立ちます。これらの野菜はとても優秀な働きをしますが、一度に多く食べられるものではありません。優秀な野菜も適切な量をバランスよく食べてこそ正しい効果が得られます。お鍋は簡単にそれが実現できる料理ですので、お鍋をされる際にはそのことを少し意識して食べみてはどうでしょうか。

平成27年12月6日（日） 地域での消防訓練



バケツリレーで消火訓練



消防士指導の下、消火器使用

風が強くなり、空気が乾燥している時期です。せいりょう園前の長砂公民館で地域の皆さんによる防火訓練に参加しました。せいりょう園では消防法に従い、年に2回の消防訓練を行っています。日中と夜間の想定で行っていますが、夜間の場合は、職員だけでは入居者の避難誘導は厳しい状況です。

今後、地域の皆さんとも一緒に訓練する場が出来れば・・・と思います。



介護職員 富田智彦

平成25年12月より働き始めて、1年8ヶ月が過ぎました。最初は派遣社員として働いていました。私は派遣として長い期間働くつもりは無かったので、5ヶ月過ぎた頃に直接雇用の話があった時は、迷うことなく決めました。他施設での介護の経験はありましたが、そこでは利用者本位ではなく介護者本位で介護を行い、利用者が拒否されても無理に行う事が多々あったように思います。しかし、ここでは本人の希望や気持ちを考えて、入浴やトイレ介助を行っていました。

今までに経験のなかった看取りを初めてさせていただきました。初めて看取った方はH氏です。まだ働き始めて月日が浅く何もわかりませんでした。どのようにケアを行うか分からず家族への連絡や先輩職員への対応を見ているだけでした。自分の出来ることは、先輩の指示通りにタオルを絞ったり、後片付けをするくらいでした。

それから暫くしてS氏の看取りをさせて頂きました。S氏は話しかけても返答なく、会話がほとんどとれない方です。そのような方は、今までに対応した事がない方で、どのように対応すればよいか難しくわかりませんでした。介助を行っているうちに表情や素振りによって反応がわかるようになりましたが、コミュニケーションをとるのは難しかったです。看取りの時、家族は園で泊まられていたので、園長と看護師への電話連絡を行いました。エンゼルケア時、清める為に身体を拭き、着替えをさせていただきました。その際、日常行っている清拭と違い、身体を拭くこと1つにしても、綺麗に丁寧に行うことには変わりはないのですが、気持ちが違い難しく感じました。

社会人になって数十年経ちますが、研修や指導を受けたことがなかった為、ここで初めて研修や指導を受け、介護の基本となる事を教えて貰い、早く仕事を覚えることが出来たと思います。この職に就くまでは「人間の最期」について考えたことはありませんでした。その人らしい最期とは何か。どのような事が、その人らしいのか難しくわかりません。今後は、色々な人々の生きてきた中で楽しく幸せだった日々の事を聞き、その人らしいところを見つけていきたいと思っています。それぞれの方にあった介護を目指し、これからまだまだ勉強が必要だと思っています。

平成27年11月5日（木） 野口公民館コーラス部「童謡唱歌」



約20名のボランティアの方々が「旅愁」「ロンドン橋」「落葉」「ふるさと」等、皆で口ずさめる歌を参加されたお年寄りと共に沢山歌いました。

最後は「今日の日さようなら」を歌い、せりょう園利用者の皆さんと握手して終わりました。

また会う日を楽しみにしています。



仏教講話 12月7日(月)



今月の仏教講話は法華宗太平寺 米沢立晋^{りゅうしん}副住職においでいただきました。

まず「南無妙法蓮華經」とお題目を三唱されてお話に入られました。

法華宗である太平寺は、平岡町にあり、近くには兵庫大学があります。法華宗は小さな宗教団体で全国に約500ヶ寺・加古川には3ヶ寺あります。法華宗では、南無妙法蓮華經の元となった經典として『法華經』を信仰しています。『法華經』はお釈迦様が説かれたもので、具体的には、お釈迦様が生・老・病・死という、人間の4つの苦しみを嘆かれ、出家し修行の道へと進み、35歳で悟りを得られました。その後、80歳で亡くなるまでインド中を布教し、最後の8年間に説かれた教えが『法華經』であると伝えられています。その『法華經』から頂戴して法華宗となりました。

『法華經』が日本に最初に入ってきたのは聖徳太子の時代であるとされ、その後、伝教大師最澄が中国で『法華經』を学び、比叡山を開いたという歴史があります。また文学の世界では、清少納言が『枕草子』において『法華經』を引用され、さらには平家一門がその繁栄を願い、巖島神社に奉納した經典類の中にも『法華經』が含まれています。このことから、昔から日本人にとって『法華經』は重要な經典であったことが分かります。



平成27年11月9日(月)～13日(金)トライやるウィーク平岡南小学校



「料理を楽しむ教室」に参加。



得意の皿回しを高齢者の前で披露。

毎年行われているトライやるウィークでは、6月は中部中学校。11月は平岡南中学校の生徒に、せいりょう園での介護体験を行って貰います。午前中は高齢者とのコミュニケーションを中心に、午後は様々なイベントを開催するボランティアの皆さんも交えて交流を行います。今まで出会う機会がなかった世代の方々との交流の中で、中学生自身が考えて動いたり、話をしたり、寄り添い、その中で葛藤する場面も多々あったと思います。5日間の経験が今後、何らかの影響があれば良いと願います。

その後、鎌倉時代では日蓮上人が比叡山で修行され、『法華経』こそが真実の教えであると体得し、32歳の時に初めて「南無妙法蓮華経」と唱えられ、現在まで750年以上の時を重ねています。日蓮上人はその生涯において、『法華経』を弘めることに命を賭けました。しかし、時の幕府に弾圧され、命を狙われたり、佐渡へ島流しにも処されました。そういった中、不思議な現象が次々と起こり、日蓮上人は奇跡的に生き延びることができ、より一層、『法華経』を信仰しようとして強く思われたようです。そして佐渡から帰った日蓮上人は、現在の日蓮宗の祖山である身延山で隠棲(いんせい)されました。残念なことに、日蓮上人の滅後、弟子たちは複数に分派することとなり、太平寺は織田信長が殺された京都本能寺を本山として、加古川で世界が平和になるようにと布教しております。

では、なぜ「南無妙法蓮華経」とお唱えするのかと言いますと、一つの要素としては先祖を回向をするためであります。回向というものは、自分たちが先祖を供養する事で、回り回って自分への功德となることを指しています。靈魂の世界への功德を積むと同時に、私たちのこの世界を見守って下さいという想いで回向していただきたいと思っております。回向は主にお盆や春・秋のお彼岸にするとおわれがちですが、いつでも毎日していただくには越したことはありません。法統(ほつとう)(灯)相続という言葉がありますように、亡くなられた父・母を想う大切さを子供たちやお孫さんに伝えることの重要性を切に思います。

人は生まれてから死へと向かう一生で、二度死ぬのではないのでしょうか。一回目は身体が亡くなる時、二回目は家族・友人たちから忘れられる時です。親族が亡くなると、何回忌というように数年に一度、法事を執り行います。法事は亡くなった方を思い出すきっかけとして大切にしていきたいと思っております。法事の席で、「お父さん・お母さん、こうやったなー」と思い出だけでも功德になるのです。近頃は、残された家族に迷惑をかけたくないからと思う人も多くなっていますが、最期の儀式の記憶が強いほど、自分の記憶が残っていくと思って、お別れの儀式は大切にしたいと願っています。

死というものを忌み嫌うのではなく、儀式を通して亡くなった人に直接触れることで、死を身近に意識して、どういった形で死を迎えたいか、悔いのないように考えていただきたいと思っております。

日蓮上人が命がけで布教され、800年近く続いた宗派を守って、法統(灯)を継承することを大切にしていきたいと考えています。皆様方も、ご自身の拠り所となる宗派を信仰して守っていただきたいと話され、最後に南無妙法蓮華経とお唱えしていただきました。

12月の参加者は施設利用者17名、ご家族4名、地域の方2名、実習生1名、スタッフ5名でした。来年の1月の仏教講話は、お休みとさせていただきます。

次回の仏教講話は、2月1日(月)15時から、リバティかこがわ2階ホールで行います。沢山のご参加をお待ちしています。

【せいりょう園空き情報 平成27年12月15日現在】

- ① ケアハウス：2室 (バス・トイレ・キッチン付24㎡)
- ② グループホーム：空きなし
- ③ グループホームまどか：空きなし
- ④ サービス付き高齢者向け住宅「リバティかこがわ」：5室
- ⑤ サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」：空きあり

[問合先] せいりょう園 Tel(079)421-7156/(079)424-3433



～せいりょう園開設30周年記念特別企画～



國森康弘氏『みとりびとー写真と講演』

平成27年11月27日（金）13：00～15：00

加古川市総合福祉会館 2階大ホール



写真家でジャーナリストの國森康弘さんは、どうしたら人は「幸せな死」を迎えられるだろう。その答えを見つけようと国内で多くの看取りを写真におさめ、取材しています。

講演では数多くの写真が登場します。高齢者の看取り場面だけでなく、天災で失われた命に向き合う家族の姿、難病で死と向き合う若い命と看取る親達。國森さんは「できるだけ沢山の写真をお見せしたい。写真を見ることを通じて『光』を感じて貰いたい。」と話されていました。

この講演に関心を抱き、200人を超える地域の皆さん、福祉関係者の方々に参加して頂きました。参加された皆さんには、「光」を感じて頂けたのではないかと思います。

「死は、命のバトンをつないでいくかけがえのない出来事。遠ざけるものではなく、温かな人間関係から生まれる看取りによって、『幸せな死』が実現できる。」看取りは、残された私達にとっては、身をもって示される最後の教育の場である、とも感じました。

今回、國森さんと御縁を頂き、記念講演会を開催出来ましたことに深く感謝いたします。ありがとうございました。

※ 11月の「介護についてみんなで語ろう会」は、せいりょう園開設記念特別企画の講演会に替えさせていただきました。